木の上と下の話

小川未明

青空文庫

ある家の門のところ、大きなしいの木がありました。すずめが、その枝の中に巣を造つていました。さわやかな風が吹いて、きらきらと若葉は波だてていました。

「お母さん、さつきから、小さな子供たちがこの木の下でべちやべちやいつているが、なにをしているんでしょうね。」と、子すずめがききました。

「さあ、なにをしているのでしょうか。年雄さんとちい子ちゃんです。おまえ下の枝までいつてごらんさい。」と、母すずめが答えました。

「空気銃で打たれるといけないな。」

「いいえ、あの子たちは、そんなわるいことをしませんよ。それに、もうこのごろは、銃を持つ季節ではありませんからね。」

子すずめは、飛んで降りようと思いました。

「だが、あまり下へいつてはいけませんよ。近所にねがいますからね。」と、母すずめは注意をしました。

「お母さん、ねこならだいじょうぶですよ。僕たちのほうがよっぽど早い。」

「いいえ、ここにいる年とつたねこは、それはりこうで、木に登ることが上手です。いつか、私ですら、もうちよつとで捕まるところでしたから、油断をしてはいけません。」

「あの白と黒のぶちのあるねこでしよう?」

「そうです。あのねこも、このごろどこかわるいのか、それとも年をとって体がよわったのか、このあいだ、下を通つたときは、元気がなかったようでした。ですから、もう前のように恐ろしいこともないでしょう。」

「前つて、いつごろのことですか。」

「去年あたりまでは、目がぴかぴかと光つて肩を怒らして、のそり、のそりと歩いたものです。」

子すずめは、このうえお母さんのお話をじつとして聞いている気にはなれなかったのです。それよりは、下の子供たちの遊びを見るほうが、よっぽどおもしろそうでありました。チユン、チユン、と鳴いて、子すずめは、下の枝へ移つていきました。

「ちい子ちゃん、このみみずは、あつちの圃へ歩いていこうとしたのだね。」と、年雄さんが、いつています。ちい子ちゃんは、白く乾いた道の上で、じつとして動かないみみず

を見つめていました。

「どうして。」

「だって、太陽が、当たって暑いから、水気のある、圃へいきたかったのだよ。」

「年雄さん、きつとそうだわ。」

ちい子ちゃんは、じつとしていて、みみずの体に、日の光がにじむのを見ながら、どうして、こんなところを歩いたのかということがわかりました。

「かわいいそうだな。」と、年雄さんが、いいました。

「あんまり、のろいからよ。もつと早く歩けばいいのに。」

「だって、歩けないから、しかたがないだろう。」

ふたりかんがが、ちがいました。

「はや、ありがたかってよ、年雄さん。」と、ちい子ちゃんは、どこからか、みみずのじつとして動けないのを知って、集まってくるありを見て、不思議がりました。

「こいつめ、こいつめ。」といいながら、年雄さんは、石ころで、一ぴき、一ぴき、小さなありを殺していました。

「年雄さん、およしなさいよ。ありが、わるいんではないわ。」

「まだ、みみずは、生きていますよ。」

「みみずがのろのろしているから、わるいのよ。」と、ちい子ちゃんは、あくまで、みみずのせいにしていました。

木の枝に止まって、下のようすを見ていた子すずめは、

「さあ、どちらが、わるいのだろうか。」と、頭をかしげました。年雄さんにもわからなかったかもしれませぬ。

「あつちへ、飛んでいけ。」といって、棒切れへありのついたみみずを引っかけて、圍の方へ投げてしまいました。

「年雄さん、お花を見つけて、おままごとしましょうよ。」

二人は、あちらへ、駆けていきました。子すずめは、母すずめのところへきて、いま見た話をしたのでした。

「お母さん、みみずがわるいのですか、ありがわるいんですか。」

母すずめは、しばらく考えていたが、

「みみずは、ありがわるいから、ありがわるいんでしょうね。」と、答えました。

子すずめは、お母さんはさすがに偉いと感心しました。

「そうね、お母さん、私たちは、ねこを食べはしないのに、ねこは、私たちを捕ろうとするんですものね。」

「ああ、そうだよ。」

こんな話をしていたとき、あちらの垣根の下をくぐって、白と黒のぶちねこが近づきました。

二

「おや。」と、母すずめは、おどろいて、

「あのねこの歩きかたをごらんさない。」と、子すずめに、いいました。

「また、私たちが、ここに居るのを知ってきたのでしょうか。」と、子すずめも、枝の上から、そのねこを見下ろしました。

「おまえには、そんな元気があるように見えますか。あのねこは、やっと歩いているのですよ。」

木の上で、母すずめと子すずめが、ねこを見ながら、話していると、あちらから、ほ

かの若いねこがきかかりました。年とつたねこは、とぼとぼといき過ぎようとしたが、若いねこは、そのそばへ寄つてきました。前には、この年とつたねこにいじめられたこともあつたろうが、いまはすべて忘れているようです。

「どうしたんですか。」と、若いねこが、ききました、年とつたねこも、ちよつと足をとめて、

「私は、体がわるいのだから、どうかそばへ寄りないうでおくれ。」と、力なくいいました。「どこが、わるいのですか。」

「なにか、毒になるものを食べたとみえて、ここまで歩くのがやつとなんだよ。」

「そんな気の弱いことでどうするんですか。私たちは、よくあなたに追いかけられたものです。あの時分の元氣を出してください。」

「もう、そんなことをいつておくれでない。私は、これから身を隠す場所を探そうと思つているのだ。」

「あなたがいなくなれば、私は、ここで威張ることができません。たとえば、威張ることができても、私は、うれしいと思いません。」

「おまえさんの天下になるのに、なんでうれしくないことがあるもんかね。」と、年とつ

たねこが、まぶしそうな目つきをして、いいました。

「いいえ、このつきには、私が、またあなたのようになると思うからです。」

若いねこは、なつかしように病気のねこへ近づきました。

二ひきのねこは、たがいに顔を寄せ合って、体をすりつけるようにして、別れたのです。

「さようなら。」

「さようなら。」

木の上では、母すずめと子すずめが、じつとそのようすを見守っていました。

年とつたねこは、しいの木の下のを通るときに、木の上を見上げながら立ち止まりました。

二羽のすずめは、自分たちを見たのかと、びつくりしました。

「おや、まだ私たちをねらうのだろうか？」

「逃げましょうか、お母さん。」

「いいえ、じつとしておいで。」

ねこの目には、もう獲物の影などうつりませんでした。ただ、その木立がなつかしかったのです。

たのです。

「よくこの木にも登ったものだ。あのいちばん高い頂まで、かけ上がるのも平気だった。」

ねこは、さも昔のことを思い出したように、木の周囲をぐるりと、熱のためにふらふらする足つきで、体をすりつけながらまわりました。

「ああ、この木ともお別れだ。」

ねこはしいの木に別れを告げるために、ここまでできたのでした。そして、もう思い残すことがないというふうには、とぼとぼとわき見もせず、あちらへ消えてしまいました。

チユン、チユンと、このとき、子すずめが鳴き声をたてると、母すずめは、しかりました。

「おとなしくしておいで。私たちはみみずになかったありのようなまねをしてはいけません。」といいました。

ある日、急にこの木の下が、やかましかったのです。ちい子ちゃんの家が、引越したるのでした。

「おや、引越したんだよ。」と、母すずめは、びっくりしました。

「えつ、ちい子ちゃんの家が引越したの。」と、子すずめが問いかえました。

「もう、私たちを守ってくれる、やさしい子供がいなくなります。」

ちい子ちゃんの兄さんは、空気銃を持ってすずめを打ちにくる子供があると、あぶな

よ。
「と、母^{はは}すずめは、子^こすずめに、静^{しず}かにいつてきかしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1940（昭和15）年5月7、8日

※表題は底本では、「木《き》の上《うえ》と下《した》の話《はなし》」となっていて
す。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木の上と下の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>